

JASMIM 2021 年度大会開催報告

大会長 藤尾 かの子

今年度で第 13 回目を迎える日本音楽即興学会大会は、2022 年 1 月 9 日（日）、10 日（月・祝）の二日間にわたり、zoom によるオンラインで実施されました。本来、今大会はエリザベト音楽大学での開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、昨年度に引き続き二度目のオンライン開催となりました。今大会では、研究発表 8 件、パフォーマンス発表 2 件が行われました。これらの発表は多様性に富み、実に豊かな内容でした。大会長として最も気がかりであったのはインターネットの接続トラブルについてでしたが、発表者及び参加者の皆さまのご協力により、大会は終始円滑に進行し、盛会のうちに終了いたしました。

今大会のテーマは、音楽教育学者の坪能由紀子氏による基調講演のタイトル「即興は冒険だ！～音楽を創造し、共有し、発展させよう！～」と同一にいたしました。感染症拡大の影響により、with コロナと呼ばれる時代に突入する中で、私たちは多くの制約を受け、困難に満ちた対応が迫られてきました。音楽に携わる者は、パフォーマンスの場、教育の場、研究の場など、各々のフィールドにおいて、様々に試行錯誤し、模索する日々が依然として続いています。そのような中、このパワーが湧き出てきそうなテーマに、即興を主軸とした人間と音楽との関わり方に対して重要な示唆を得ることができるのではと期待を寄せ、このテーマを本大会のテーマとしても掲げることといたしました。

基調講演では、坪能氏より、日本の教育界における音楽づくりと即興の変遷に加え、国内外での即興のワークショップや、坪能氏が考案した、授業者・授業者に音楽上の情報を提供する者・子どもづくり出す音楽を自らの音によって支える者という三つの役割が明確化された TAS モデル（T : Teacher, A : Adviser, S : Supporter）を用いた教育現場での即興演奏など、数多くの映像と共に、大変興味深い実践をご紹介いただきました。坪能氏による実践例からは、「誰でも参加可能」であることや「自由であること」、さらには「多様な音楽様式への広がり」という音楽づくりの特徴について学ぶと同時に、子どもと音楽即興の関わりについての見識を深めることができました。坪能氏の言うように、これからの音楽教育の存在価値が「創造性」の育成であるとするならば、自らの音楽観やこだわりをもとに独自の音楽を創り上げていく即興の教育的価値はますます高まっていくのでは、と胸が高まりました。

大会二日目、締め括りのプログラムとして、昨年度に引き続き「JASMIM マッチングプロジェクト」を活用した会員・非会員による交流会が行われました。このプログラムを通して、研究者や演奏者を含む実践者らは、即興にまつわる自身に関係する分野の人や、あるいは他分野の人とオンライン上で交流し、活発なディスカッションが行われました。即興を主軸として、みなさまがゆるやかに繋がることのできた、豊かな時間であったように思います。

このように、2 回目のオンライン開催となった本大会は試行錯誤しながらの実施ではありましたが、大会全体を通して「音楽と人間のあり方」それ自体を問い直す機会が多くありました。大会開催までの道のりにおいて、至らない点が多々ありましたが、参加者のみなさまにはご協力と

寛容なご対応をいただきました。心より御礼申し上げます。次回の第14回大会では、また新たな試みや学びが実現されることを切に願っております。